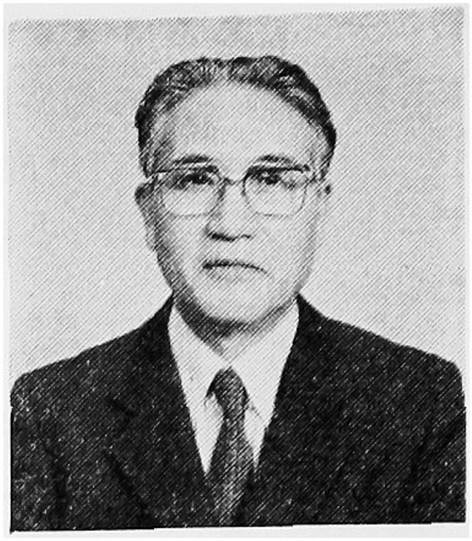
社団法人設立前後



日本学士院会員
東京大学名誉教授
東京農業大学総合研究所教授
日本農芸化学会名誉会員，元会長
松井正直

私が農芸化学会と深いかかわりあいを持つようになったのは，農芸化学科の助教授になってから，すなわち昭和 28 年の秋からのことです．

当時農芸化学会は事務所として，東大農学部2号館の図書室の一部を使用していました．そしてその隣りが私たちの研究室でありました．物理的にも学会と私とは近かったわけです．

学科の若手の教授と助教授―できたばかりの応用微生物研究所の方々を含めて―は編集幹事なるものを仰せつかっていて，毎月1回編集幹事会なるものがあり，投稿原稿の割りふりをし，また読まされた原稿の報告をしていました．そのほかもろもろの雑用を命じられたり，命じられた雑用の報告をしたりしました．そして最後は酒もりとなるのでした．

幹事長は編集委員長の住木諭介先生でした．先生は編集のみならず学会のために精力的に活動されていました．当時会長は奥田譲先生で福岡，副会長も佐藤喜吉さんで大阪というようなことで，東京におられる体のよく動く年長者というので仕事をおしつけられたのだと思います．もっとも昭和 30 年からは住木先生は副会長になられましたので当然の仕事にもなったのでしょう．

さて幹事といってもちゃんとした辞令を頂くでもなく，学会の雑用があると，誰かが命ぜられたのか，たのまれたのかも不分明のまま，手分けをしてやっていました．私も会誌の投稿規定をちゃんと作れと言われて，今は東北大学の教授をされていますが，当時は助手の山下恭平君に手伝ってもらい，化学会誌の投稿規定を参考にさせてもらって急いで作った記憶があります．雑誌を作る専門的なこと，割りつけとか，校正とか，印刷屋との交渉などは学科の先輩の櫻井滋さんがやっておられました．おとなしいやさしい方でした．ほかには字のきれいな細貝せいさんというご婦人が会計とこまごまとしたことをやっておられました．事務の方といってはこのお2人だけのようでしたので，幹事の方々の手伝いも必要だったわけでしょう．

ところで 20 年代も終りになりますと，日本でも研究活動が活発になってきました．そして日本の農芸化学者達も欧文で早く報告を出すようにしなければならん．それには農芸化学会も欧文誌を出さなければいけない．ということで，戦前は雑誌の後ろについていた欧文の抄録部分を独立させて，Bulletin が出されることになりました．これはもっぱら住木先生のたいへんなご努力でした．はじめの2年ほどはうすい雑誌が4冊，次の2年は6冊，次の年は7冊で，誌名が *Agric. Biol. Chem.* と変った昭和 35 年より月刊となり，今は頁数も多くおしもおされもせぬ立派な学会誌となりましたが，はじめのころのものは数年合せても今の半年分にもならない頁数でした．私もこの農化欧文誌を最初のものから貴重な持物として持っていました．古本屋が高く買うから売ってくれと言ってきても売らずに大事にとっておきました．しかしゼロックスの出現以来，バックナンバーの価値も下り，今は売ってくれという古本屋もなくなりました．時代も変ったものです．

欧文誌が出るのを契期に，あるいは時代も大分に落ちついて，助教授，教授の本来の大学の仕事がふえて，学会のお手伝いがおろそかになってきたせいもあってか，事務を強化しなければということになったのでしょう．今は学会出版センターにおられる山田猛さんが事務の手伝いに入ってこられました．そのころは櫻井滋さんも引退されていたかもしれません．そしてお嬢さん方もふえて事務も四，五人の陣容となりました．

ところが学会は当時任意団体でありましたため，事務の方々の待遇が一般の会社員とか公務員とまったく同じというわけにはいかない．学会もちゃんとした法人にして，事務の方々にも落ちついて働いてもらわなければいけないというようなことで，社団法人にすることになっ

たのでしょう．当時私はまったくのかけ出しで農芸化学会の本当の内情は知りませんでしたので，この社団法人にするにつけても，会長をはじめとする役員の方々がどれほど苦心になられたかは知りません．しかし今こうした法人を一つ作るのはたいへんな仕事であると聞いております．

そして昭和 32 年 4 月に社団法人日本農芸化学会が発足ということになりました．私も新法人の最初の理事の一人にさせていただきました．

そのころの理事は皆若くて 30 代の終りか 40 そこそこで，年とった先生方におこられ，おこられながら，何やら過ごしていたように思います．

そのうちに今の事務長の原田積雄さんも山田猛さんと交代で来られたように思います．

さて大学が学科の膨脹で手狭になって，学会の事務所も大学に明け渡そうということになってきました．それにはどこかに適当な場所をさがさなければなりません．それで農芸化学会の創立 50 周年記念事業の一つとして事務所を大学外に求めようということになりました．薬学会がビルを渋谷に建てるのでその一部にという話もありましたが，結局今の場所を求めることにきめたのです．このことにたいへん尽力されたのは，50 周年記念事業を始めるに際して常務理事に就任された松居宗俊さんでした．50 周年の募金も十分に集まらないうちに，銀行から借金して今の事務所を買われたのでした．これが大成功でして，その後建物の値段がどんどんと上って，後になってはその何倍も出してもあれだけのものは手に入らないということになりました．

それ以後の農芸化学会の発展飛躍ぶりは皆さんご承知のとおりです．会員も 1 万人を越え日本でも数少ない立派な学会となりました．ますますの発展を祈っております．

それにつけても昔の学会は今の整備された学会を見ては考えられないような，町工場的な色彩の強いものでありました．まことに今昔の感にたえません．

つまらぬことを思い出すまま書かせていただきました．